

新撰陸奥風土記

陸

庫	文	閣	内
七	三		和
四	六		書
函	五		類
二	〇	二	
二	冊	號	
架			

地 三 七

内閣文庫	
番號	和 36502
冊數	10 (6)
函號	174 288



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak





新撰陸奥風土記

六

新撰陸奥風土記卷之六目錄

名所中

野

原

牧

田

橋

海

浦

濱



瀨磯渡崎嶋鴻

新撰奥風土記卷之六



新撰奥風土記卷之六

仙臺 保田光則撰

名所中

野

一宮城野

宮城郡國分小あり

堀河院の御時百首寄るけり時と申のふ

をよみけりけり

前中納言一匡房

千載夏

大宮前大政大臣家より夏月如秋とて

大宮前大政大臣家より夏月如秋とて

よめる

孫系数件

口 小秋京まづい花さのぬこやまの志のやこふの月山河らん

孫系基後

口 秋上 こゝやまの秋や小麻のつゆ終らん花さの河より秋のりひる

堀河院所時百首歌まらけり時ある

源俊賴歌

口 さゆふんそとやまのこやまの秋花のつゆの 虫のつゆ

麻の聲あふ方とつるをよめる

貴延法師

口 秋下 高僧那の小秋の系を秋のつゆの麻のさるをよめてゆくれ

西行法師

新古今秋上 名いふ学業のつゆ終らん秋風さぬを博の系

孫系惟成あつりけるよみ人志

口 意五 こゝらふんや小秋のつゆまの秋の系を業を博より

野かふるあふを人をもふとつりけ

赤深湯門

口 雑下 吹風さつとを博の系を小秋の系を人のよめり

名所奇まらけり時 三家歌

口 續後撰秋上 けりあぬ花のちるをよめて風の上を博の系

順徳院御製

後古今扶下

玉葉城のふるのこぼれ秋やちりぬらんあつたれは所を麻のこゑ

正治二年百首

夫木言城のふる陸奥
夫木言多院のふる京のふる

二品親王守覚

玉葉城上

玉葉城のふるのこぼれ秋やちりぬらんあつたれは所を麻のこゑ

曰々

玉葉城のふるのこぼれ秋やちりぬらんあつたれは所を麻のこゑ

後千載上

後徳大寺左大臣

玉葉城のふるのこぼれ秋やちりぬらんあつたれは所を麻のこゑ

曰雜作

前大納言為成

玉葉城のふるのこぼれ秋やちりぬらんあつたれは所を麻のこゑ

山階入左大臣十首歌合小野草

三條入左大臣

後拾遺

玉葉城のふるのこぼれ秋やちりぬらんあつたれは所を麻のこゑ

安部門院別当

玉葉城のふるのこぼれ秋やちりぬらんあつたれは所を麻のこゑ

和歌所ふる百首歌よりけふ旅奇

鴨長明

曰旅

玉葉城のふるのこぼれ秋やちりぬらんあつたれは所を麻のこゑ

新千載秋

前大納言實教

玉葉城のふるのこぼれ秋やちりぬらんあつたれは所を麻のこゑ

拾遺上

松葉知
定家朝臣

秋ふはひて身と心なる雨と下と露とソノ目とこのまゝふは五律の系

家隆朝臣

秋ふはひて身と心なる雨と下と露とソノ目とこのまゝふは五律の系

建久二年左大臣將奇合地部

拾遺愚外上

かゝるもかゝりうひとやあゝとん五律の系遠の夕ぐれ

院句歌五十首款月前学花

同

五律の小風まらりりあゝと秋の枝の葉をまをてあゝる月子

百首奇の中

同

五律のこゝろもあゝる秋の葉をまをてあゝる月子

後系極接政治家の命ふ 家隆朝臣

五律集

五律集

五律のまゝ秋吹さらけ秋をふまをてあゝる月子

建暦三年内裏沙奇合ふ

夫霞

人かゝりもやちよとあゝる五律の系遠の夕ぐれ

貞、永元年奇合ふ

日

五律のまゝ秋の上のあゝる月子

秋の奇とあゝる

日

五律のまゝ秋の上のあゝる月子

秋をまをてあゝる月子

後頼朝臣

五城のちるふくろり衣をのふちりすし秋のちるふ

とまふし

藤原顯仲親臣

良玉集

五木のつと秋おひゆるる如良ふあふくしけのふ城のち

権僧正水縁

堀河百首

こよもれ秋のふ秋系分約の上葉のつゆり神をぬれぬる

左京大夫影輔

日

五城の子ふふ葉を結ひまき花をむらふはすいん

師時

日

河あけ花をより五城のふあふのふ秋枝をくろし

枯野

家隆

六百番

麻のちるもむら秋をえてまをぬをぬ五城のち

建保百首

玄湯内侍

日

尺やまのやむらるる秋の上葉よりくろしはぬをくろし

家衡

日

と秋麻のちくちるくろしやん秋ふあまると五城のち

俊成女

日

はるのちるも秋のちるふすむ月を秋ふ五城のち

忠定

日

と秋けぬく枝をくろし五城のち秋のちるふのちる

行能

吹あぬ風いづれもさききたるもよまの秋の夕をれ

日 康光

うま城のや分入あまの衣もふあなゆのけなるも秋の光摺

拾玉 慈鏡

いりまのとうりまの神もくけりふくまの秋の花をり

こやまのふたつてきまの秋の光をり

日 五城のまをい出れあまの衣もふあなゆのけなるも秋の光摺

月清集 経京極

あたるいふ旅の神のあなぬん木の下のふるま城のる京

家隆

玉吟 こやまのうたはふりかり衣もふあなゆのけなるも秋の光摺

みやまのうたはふりかり衣もふあなゆのけなるも秋の光摺

御集 法橋公

夫本難四 いとんまのうたはふりかり衣もふあなゆのけなるも秋の光摺

家隆卿之於松出清慎公之於松樹法性

寺之於玉椿皆可怪志光則曰古の松出清慎

身も名も移る松出清慎古の松出清慎

まもるん

白玉椿 法性寺道関白

同樹部 宮傳のうたはふりかり衣もふあなゆのけなるも秋の光摺

百首歌

寂蓮法師

門
清くはくし玉傳の系はくはめくふに死なず秋はもあはれ

百首歌原露

從二位家隆

門
素秋さくし玉傳の系はくはめくふに死なず秋はもあはれ

光明寺入道攝政家奇合野連早秋

同
もろの花のひとふはくはめくふに死なず秋はもあはれ

文治八年奇合

皇太后宮大夫後成

同
中略をけき玉傳の系はくはめくふに死なず秋はもあはれ

正治二年百首

同
あまの秋の下を系はくはめくふに死なず秋はもあはれ

門
宝治十年奇合野外雪 山階入道左大臣

ちかやまの秋の系はくはめくふに死なず秋はもあはれ

花玉集

けいしきまやまの所にありとみ

西新法師

門
玉傳の系はくはめくふに死なず秋はもあはれ

源氏相堂

月ふる人さくし玉傳の系はくはめくふに死なず秋はもあはれ

あんとけあき人さくし玉傳の系はくはめくふに死なず秋はもあはれ

にもくくぬぬおほつちあきと今に秋はもあはれ

みうけさくし玉傳の系はくはめくふに死なず秋はもあはれ

後へり

玉傳の系はくはめくふに死なず秋はもあはれ

同東屋

浮舟母

サ瑠

古今之志四

一玉田横野

いそやんを色れををせし人ともかゝるえんて
君はいとよまかりけふかよといひぬるを
山をうらるといふりあけけるまよはすのり
あつと孫いづるふとと孫
志久火しし小森うよまよふぬふいづるを孫まうる小森
とつるい女おいとまうしく堂をま

よと人しうけ

玉田横野にありの小森を孫をま風を結ぬ君をま

宮城郡小田原村有奇枕林のね覚小河内のみとす

俊頼親信

堀河太所台首又名寄

とつりつりけ玉田横野のまを孫はしのイまよふぬふいづるを孫まうる小森

のけたね葉集又秋のね覚親首

一般若手野

岩手郡

永久二年太神宮祢宜者合落いそと野

よみ人志久

夫亦

誰をいそと野意の花落まよふぬふいづるを孫まうる小森

堀河院百首

隆源法師

日
まよふぬふいづるを孫まうる小森

一安多思野 あつちの野

建保三年内大臣家百首歌名所意 あ

野 陸奥 又大和 家長朝臣

まふ集野

あつちの野 あつちの野 あつちの野 あつちの野 あつちの野

貞応三年名所百首 為家

草分る衣手涼 あつちの野 あつちの野 あつちの野 あつちの野

御集月五首 野月 後鳥羽院御歌

嵐 あつちの野 あつちの野 あつちの野 あつちの野

一安達野

一安達郡

内大臣

安達の野 あつちの野 あつちの野 あつちの野 あつちの野

此外の青 あつちの野 あつちの野 あつちの野 あつちの野

一吉野

即下 あつちの野 あつちの野 あつちの野 あつちの野

原

一 真野萱原

牡鹿郡志野村あり或云行方郡志野の廿二
其白菅の志野ハ攝津八田郡志野と云葉略解云

笠女郎贈大伴宿禰家持歌

萬葉二新載一
陸奥之真野萱原雖遠トハケレトオモカケニシテ面影為而所見ニエトイフモノヲ云物乎

檀大綱言顯朝

續古今志

よるんは侍もたふにふまのわかや系落りかきん

定家新注

玉葉夏

玉葉夏
よるんは侍もたふにふまのわかや系落りかきん

幸村の旗東南管崎村の末

皇居宮下人々 意教つふまかりける所あり

大宰大貳長實

金葉巻下

みりけのあひをみふふ有けりし 心もつる けふの松を

正三位秀能卿

夫木集

そりぬる恨も程もあむやと未とありてふ けふの松を

一信夫原 或作信夫河原

信夫郡

歌枕裏書云今按考萬葉集第七問答

佐保河爾鳴成智鳥何師鴨川原乎思努比益河

上人社者意保尔毛言目我幾許師奴布川原乎
標結勿謹

此哥只寄河原戀慕之心歎哥枕原部立

之条如何但家隆卿八條院高倉里哥以

此本哥詠標結可思之志

洞院掾政家百そふあふ意とよる人歌

家隆

續古今卷一

人の世も信夫の系ふゆふとあひけりし けふの松を

原上露 ちふの原 陸奥

皇屋入道前掾政

新拾遺扶上

あはれもいきて露やわらふ 陸奥の信夫の系ふ秋風を

昌徳四上皇院以隆子

一後多の百首

口秋

安達野の秋風そよそよしほく清くもものともや麻の吹せん

如願法師

久安百首

前巻撰親隆

口

安達野の屋敷にうらまはにほのむる所や麻のたぎらん

建保三年名所百首安達野

正二位忠定

口冬

安達野を雪降ふりう都人のひらぬきもけあふりて

百首歌

寂蓮法師

口秋三

安達野の系いねきりてりかかぬ武くまのね

口冬

建保三年名所百首

正六位家衡卿

安達野の系いねきりてりかかぬ武くまのね

物名

親善法師

後後拾遺

分佐ぬきねきりてりかかぬ武くまのね

新撰六帖

光俊朝臣

安達野の系いねきりてりかかぬ武くまのね

一市師系 奇枕小一志浦と伊勢玉を

秋のねつゑ六帖

安達野の系いねきりてりかかぬ武くまのね

古歌

けふのいよぢ

安達野の系いねきりてりかかぬ武くまのね

堀河次郎百首

忠房

冬来ぬすけはるすふいちをく市師の系少少水地

新六帖

家良

くはるふささよしをなと陸奥の市師の花の名ふまけ

定因

梅もそまはれ山風吹ぬんしらの池水ゆるる志

源兼

新拾冬 五親に一志浦伊勢國と云

玉藻のるしらの海すのぬまを衣ゆふてさくまぬ

一宮城之原

陸奥守まきまのふよ五

牧

一尾駮牧

小那のまは海邊ふ以牧の名跡まると今い首戸野と

云ふ移したりとそせふ

まをこのしめふいふ甘さるさゆふのありん

女のりまきんをけぬるそあふくはたぬ

さゆふあふまをさといひけりし目

讀人石志

後撰雜四

陸奥のそふりた弱も野飼ふはりそはまらあつた

攝則長父のそりたあちちそけりしそは

多うまひりさるるをん付りて男いさも志きり
りまらハ又れ日つうりる

後拾

相換

鑑とそそまのしをそふしりのくれまの約をまふふ

後堀河百首

兼昌

永久四年百首

またしつるをふりれ約れ先さうてそんる人さるりる

壬生集

測へる水はまき名ふおまね極麻のまふりの約のまの村え

良道法師

後拾

き夜の笑れ秋むくひらにはをふりふまの望月の約

一 せ荒野牧

こ五博那 荒野村かろく

後拾

千五百番者合

釋阿

陸奥の荒野の牧れ野ふとそむらひて別れ物と

一 立野牧

出羽国秋田郡 立野村かろく

家集 雄田山

陸奥

好忠

陸奥乃秋田北山 秋野れ立野の約ちるまぬり

一 奥牧

奥の海と云ハ陸奥の海をさうてくくふまぬく口を原

陸奥の牧と云ハおる原

慈法

東路の美北牧場の荒れを治るに力を尽す

為家

陸奥乃牧の荒れを治るに力を尽す

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

田

一 薬田

玉造郡名生定村の中ふ七田屋敷とて七田方とて申

小薬師田といふ有るはふや

松葉集通章

あつ慶法師

甘露塩三

くさくさ田の袂小浜ふみやめを玉造にふひけり

一 小嶋田

名取郡

源重之

夫亦

名取川沿をくさくさ小嶋田とてふはつけはねのた

一野田

うま城郡野田玉川の邊にあり

百首御奇 の田とちのく

後多野流御奇

又田 中野水野田のうはてふせく池のこきふ靡くたのむつら

建長五年毎日一首中 為家

日よる 里人や野田のよみかをとすくらん 汀を渡る玉川のぬ

橋

一途絶橋

うま城郡岩切の籠れ通所よりあり今とてらまの橋と云
橋のよとてらまの橋を大和ふあり一説通はた云

橋上月よりあそむとよあつ鏡み人よみ侍りける

小とあえのん 陸奥 橋大細言実字也

夫亦羅三 遠近の人をがらぬとみける月よとての橋をりける

詠新末意 正三位少経卿

日 いふみしとてえの橋小むひてのつらぬとての橋をりける
永久四年百首額不見書意

同又松河百首

後頼朝臣

いづや又ふこもさうはなすしよたえの橋はうらめさふ
夫木集ふ此奇ハ人のとらりりめじヤセ
近事もはなれふいうける事にもみもははせぬ
かち中たるし近事と云

相摸

藻塩草

いづやとらぬ心るさえの丸木橋はるるもの地ふん

為尹

千首寄橋述後

いづやとらぬ心るさえの丸木橋はるるもの地ふん

一面和久橋

宮城郡塩釜の正所為谷村の古橋に葉山の側

あり地名所

ゆりたる多はをさまみりのつらなり
いづやとらぬ心るさえの丸木橋はるるもの地ふん
いづやとらぬ心るさえの丸木橋はるるもの地ふん

西行法師

ゆまうきね葉は縁を志まき今がらぬ西の橋
志はふれ里よりやくに二日をりなりとあり夫木集
橋部ふ家集をひまきおむくの橋 陸奥

此等ハ信実郷よりやく一日二百きりなり

建保名所百首

権中純言定家

新千載卷五 の百首
吹雪のふるもあけきくはる契とくを程の橋の舟もえんは

民部公資

日
あはれやうきとくえん乃橋柱つき花とくろくえんは

為氏

日
軍門もその名もほししあはれをそと程の舟もえんは

藤原長秀

新千載卷四

に糸けを程の橋やゆか申ふかきりくそこの契りあはれん

延文二年百首歌寄橋恋

前大僧正俊俊

日
ふくしん契りのほも白むれ結るえの橋ふけえんは

六百番歌合

定家

日
人らり結るえの橋ふえんは水の葉ゆり秋の道り

建保名所百首

順徳院御製

未踏の結るえの橋もあはれとていふもあはれとていふ

家隆

何れかあはれをたのみ結るあはれを結るの橋も月をまけ

竹園三百首

宗室の親王

夫亦難十四鏡

山多れはる人の橋ふ結るけがさきよはる秋のあはれ

建保名所百首

僧正親意

つふ坂さけふえおもむちのつれさるえの橋の末のたむ

玄海内侍

思ひのつらふふあてひらふれきたえの橋のたやた

家衡

末路やまらしてつらつらつと結るのほらふらふ

後成卿女

あつらひまじりしつらつとつらつとつらつとつらつと

行能

つらつとつらつとつらつとつらつとつらつとつらつと

康光

つらつとつらつとつらつとつらつとつらつとつらつと

六百番

幸橋恋

経家

つらつとつらつとつらつとつらつとつらつとつらつと

定家

つらつとつらつとつらつとつらつとつらつとつらつと

建保二年名所百首 緒絶の橋

西三位忠定卿

つらつとつらつとつらつとつらつとつらつとつらつと

源氏七藤袴巻

つらつとつらつとつらつとつらつとつらつとつらつと

つらつとつらつとつらつとつらつとつらつとつらつと

みろくくふりけきまの橋を 夫木橋類 陸奥

能因法師

くろねん姉も橋をくろねん 風吹くまき源也

源也草 和集

あはくく姉業の橋をくろねん 壇風吹くまき源也

按能因者親見之人也今與此地異也想

夫別有稱姉羽橋者予考下一首則自稱

松于此地者無可疑然至詠水濱者則不

合焉如何志

一十綱橋

津輕郡 八雲坊ふ云子綱くろねん流る二云の橋を
和集

百首歌よりける時志の考とて流る

前卷意識親陸

千載名心二

陸奥のころも橋ふく綱の流る人よふくくろねん

家隆卿集

東路十綱のころもわくく綱のころもわくくろねん

二首橋述懐

藤原宗遠

新拾遺雜中

東路のころも橋のころもわくく綱のころもわくくろねん

橋述懐村

新拾遺雜上

東路のころも橋のころもわくく綱のころもわくくろねん

一小川橋

拾

ほくしよりさきまへにわたりし小川の橋のたもと

業平朝臣

夫亦

陸奥の小川の橋のたもとを後つるをよむに我もよむに

とみ人老の語

一野田の一橋

野田の玉川の橋也

平政村朝臣

夫亦抄巻廿一

杉原の野田の入江に一川橋あり細くともよむに

海

一奥海

只陸奥の海をいふ也

子五百番歌合

定家

新古今巻四

くわの自らるはるきいのみ奥に海は若原のうきよに

順徳院御製

續古今雜上

くわの自らるはるきいのみ奥の海は若原のうきよに

常陸井原前太政大臣

續後拾遺巻二

若原の海は若原のうきよに

後鳥羽院御製

曰意一

秋為にほきき心の奥に海よいうるあまれもめくらん

新千載冬 元九二年百首

前中納言為相

秋とささるのたふふやあまの海の川系れをるまて定

左大臣

新續古今意四

あはれくはせふ心の奥の海の人まをりてあまのそとせん

歌一しりて 陰業

らみ人志るは

夫亦雜五海

奥に海の境平乃うれかたひせむややうん道のをと

建保四年百首

後二位家隆卿

夫亦冬二

さゆら秋ハ家守まのてあもる奥に海の河系の郷月をりん

壬生下

奥の海やえそこの岩屋の想ふはあまれく風あらん

夫亦海

秋うらまそしきまは晴の人あまはあまのそとあまのあま

はまのれり

後九條

浦

一名取浦

関上ユリマテの江濱エノハマと云ふ

出シ色シ葉ハ集ル萬ノ葉ノ名ヲ所ニ浦ノ部ニ索ス之ヲ萬ノ葉ノ集ル

未得其証歌ウケ

一十舟浦

十舟ハ古ノ城ノ郡ノ利ノ府ノ也ノ利ノ古ノと利ノ利ノ根ノ川ノのノ野ノ之ノ
ノ東ノのノ浦ノと云フ舟ノ處ノ一ノ或ハ岩ノ切ノのノけノらノと云フ旧ノ跡ノ
ノ細ノ少ノ小ノ丸ノ戸ノ郡ノ中ノ田ノ比ノ何ノよりノ古ノ名ノ古ノ處ノと云フすノと云フ比ノ
ノ古ノ今ノと云フ之ノハノ比ノ古ノ比ノ今ノと云フと云フ心ノをノ外ノ

新古今歌

橘為仲

塚

み一人とふれ浦風をせぬつはあけ澄る秋のよの月
玉の香ふ散らさるるさるるのいづれも其をさき十の村のまゝに

新葉

一も思ふ十の村のまゝもみよふふつたおれおやねる

いお香も十の村のまゝの條ふ出は

中務に親王家五十首昔合秋風

去本能同と有
長明

陸奥の北の村のまゝ層にありて仮旅旅し十の村の浦風

同

夫亦

流るる玉もれおのひもものあもさふ何と十の村の浦人

弘安百首

長雄

稀ふふとふれ浦風をつはあけ澄る秋のよの月

光則も香ふ利府岩切村まゝの海色も遠き哉

浦とらふ田をれ浦の條よりさるる山陰地人

甲をもちて浦とらふさるる友を層々も田舎

おて田をれ廣き一方は沖とらふおと山里より

出て足ぬい廣くして海色の如きおより浦

とも沖をりふ生を層々も何崎形とらふさる

海色も遠くみよふも廣き田を沖中ふあり

仰集

まのふまゝ信夫の浦の秋の風ふあつたに浪はな

一 塩の浦此浦

雛の子笑塩竈乃所ふ妻しくあり

一千笑の浦

同上

一 水江浦

家集

このまはうり佳桑

能因法師

藤原やと海すふとにほとろろの浦小相さつ

了矣州より船をさひやりて 同

小松みく顔ふゆる月影を又月えは浦ふとむり

一 松か浦

今松の濱と云所のこふ松の浦崎と云つて松の浦

とありていりぬ角一松の濱に古城形一耳光志

ふし松の浦崎の所は松の浦とありて久松教ありて

麻都我浦

一万葉十四

麻都我字良尔佐和惠字良太志麻比等其等於

毛抱須奈母呂和賀母抱乃須毛

慈録

拾玉

四方の海やまののけき松の浦のまは浪よま風を吹

定頼者のつて

光成

薩塩州

久米えぬりちるはまにあぬ衣子にゆるはるけを松浦は

夫亦

松の浦のともりう破とゆふのを名もはしをひかへる信を

一 按松山泊磯松浦考之奇則共同可也志

一 浅香浦 又一ーづ

新志

後成郷

夫亦

身所めと吹ふりしをまきかす海の浦の秋のものせ

一 田子浦

之五城郡田子村に立府出る葉云は所海辺にそりかけ
生ても山陰の人里を浦とひらるるなり文治五年

頼朝下向時は所小籠泊のふとらふ二本亦とまな

ハ此不新とらふ

よみ介ら

夫亦

あらうな君の代陸奥の田子の浦崎とみそ

一 一海の浦

本を廣

夫亦

仲は風やうそりし松崎やと崎の浦に新志

濱

一 素郡濱

津輕以北地土人謂之外濱 志又名物類云たふるの

多し青世云せり

家集その名の濱

陸奥

西行法師

陸奥其地ゆめりしそかよふるつるのふも外に濱風

一 字多乃を濱

字多那今お馬崎とつる出崎の地あり今もを源

と云

よみ人しり

陸奥大津のゆの濱の丘せ具合せもらんミヌヤイのせは妻具白

家集

伊勢

年ふゆをいつとふこそ不志の濱をさるふ濱り

[Faint handwritten text]

一 家集

酒

一 浅香酒

浅香郡の万葉集未基國の中ふ出せり畧解ハ
あせくたをたをり

一 万葉十四
柿本朝臣人麻呂歌集出也
安齋可我多志保悲乃由多余ナ於毛モ敵良ラ婆ハ守家ウケ
良我波奈乃伊呂イロ余ニ氏未也メ母モ

新六帖

正云伍知家

浅く浮きけりゆのまのいともいふこそをねりゆを

藤原歌伴

良玉
ほろのほいと高きあたりのせごまかろく神のたてをいれり

後六郎

（Faint bleed-through text from the reverse side of the page)

一内香則

則

嶋

一鹿嶋

且理郡鹿嶋村香し隈の南亦有うー海女おほ隈川
とほけし

源順

一多湖浦嶋

字城郡田子村亦あり

一字折

産恒孝五

よみ人高久

ま本
あゆまひまの心をしものせ田子のこころはみえ

口
けいふを解く人けいふくふけいふたけいふけいふハ名のと成り
中納言家持のとてけいふけいふけいふ

山口女王

新古今意五

浮雲の浦にまよふもよめる浮雲はまよふもよめる浮雲はまよふもよめる

夫本集みちの玉一とくまのりもよめるもよめるもよめる
みちのりもよめるもよめるもよめるもよめるもよめる

小野小町

續千載旅

みちのりもよめるもよめるもよめるもよめるもよめる

後鳥羽院御製

續古今春

浮雲の浦にまよふもよめる浮雲はまよふもよめる浮雲はまよふもよめる

うき崎の橋渡して侍りけるこころ

能宣集とてり

兼盛集不見此奇能宣集三有
兼盛

家集

うき崎の名ふ少りけいふ浪の上ふもよめるもよめるもよめる

按称浮嶋橋不知何地姑譽此志

天曆八年中宮七十年賀屋風の料能如歌 浮雲

信明

家集

うき崎もよめるもよめるもよめるもよめるもよめる

為仲幹臣

同

めりつ程を程のみちけいふに志の程ふ浮雲の浦

大輔幹臣

浮雲は程の程の程のみちけいふに志の程ふ浮雲の浦

丈夫集家集

為仲胡臣

浮世をたふさくは陸奥にたのめ事なりけり

延壽十七年浮世の事なりけり

不々々々世に浮世の事なりけり

浮世

躬恒

家集

いふやうな事なれば浮世にたのめ事なりけり

此歌咏似登述懐其意不可曉志

村上先帝の御時の足屏風よと可く此名をかせ

浮世の事なりけり

中務

曰

あつたぬけりてあつた事なりけり

一條大政大臣家障子浮世

能宣教臣

丈夫集

川海の底に根さぬ浮世の事なりけり

御屏風浮世

忠見

家集

おもしろい事なりけり浮世の事なりけり

家集意歌

源仲正

丈夫集

意歌なりけり浮世の事なりけり

去御門内大臣家歌合遠嶋朝歌

鴨長明

同

浮世の事なりけり浮世の事なりけり

永観二年八月一條大細言家障子歌 まほろ

平祐春

日高 浮きぬ松のこころをなげきと路のまをそかきみそめたる

長久三年齋宮奇合

日 あさるをゆる浮きぬる海士人のつらむはたふとゆるむらさ

浮城

家集

あつ浪のうらむらあつ浮城のこころはたふ根こそもふたれ

拾玉五

たふはたふをこころはたふあはたふはたふをこころはたふ

家障

壬生上

沖の風はあつふをそはたふはたふの氷ふもくし海は松

一 離島 羅磁

増竈の東十八丁ふあり

何川や歌の舟みりたふ奇

古今天奇所中歌

つらむをたふやつをたふめたふはたふの路のまをそかき

はたふの糸の糸はたふやつをたふあつふのけの糸はたふ

まりのの糸あつふとまのくし奇ふみかた

まのくし糸あつふ可きしとひりま

源清蔭朝臣

後撰意二

まのくし糸あつふ乃有れ目いふまよりねむく地はあつふ

讀人不知

拾遺夏

卯の花のさける垣根いさわのくはさきをの波をとる

陸奥中ふゆりも時忠義公のよき中送ゆりも

家集の堀河のやうの言はれをま

つえし討ちのまじりきとあり

源信明朝臣

新撰夏

つげの氷のさける垣根いさわのくはさきをの波をとる

名所歌よみゆりも時忠義公のよき中送ゆりも

續後撰雜

みちのけのまの記のさける垣根いさわのくはさきをの波をとる

曾根好忠

續後拾遺夏

夕なほ小砂田のさける垣根いさわのくはさきをの波をとる

権中納言實量

新續古今秋下

秋のさける垣根いさわのくはさきをの波をとる

むきの花貝

後頼朝臣

秋枕

まき風小波や織もんまのくはさきをの波をとる

百首奇舟踏卯花

家隆

同

卯のさける垣根いさわのくはさきをの波をとる

名所奇冬歌

去御門院御製

御集

やまのさける垣根いさわのくはさきをの波をとる

秋風集

法皇公歌

哥枕

長月のさける垣根いさわのくはさきをの波をとる

月

家隆

同

ふゆのさける垣根いさわのくはさきをの波をとる

日

知家

山田のまじ羅ふさぎ流のうらふ若舟やき衣かけて不毛
白川流日く藤花を散らふ事をも

よしの朝臣

夫小集

うら流のまの松山いづれん世の踏をうらふ事をも
此款の梨壺小和舟の料をくわくは流る不傍の
内侍のうこそささしつる年より藤花を地よりか
しそけりし山かをたるとそと

海之流乃いづり 陸奥

大訥言師氏

日家集

うらりのうらまは流のうらりおあつてくふれりいづく無は流る

日家集

大入道殿は笑の口屏風羅能嶋

あふ作 未のまふ

よら流のうらまは流のうらりいづり世の踏のうらりか
のうらまは流のうらまは流のうらりいづり世の踏のうらりか

檀中納言定頼

夫小集秋五

別流のうらまは流のうらりいづり世の踏のうらりか

よら流のうらまは流のうらりいづり世の踏のうらりか

檀中納言通俊

よら流のうらまは流のうらりいづり世の踏のうらりか

永久四年九月雲居者合菊

寛盛法師

日秋

秋のうらまは流のうらりいづり世の踏のうらりか

日夏

あつ浪の離の崎に立ちよ海をくまふふ心よかた

六百番歌合追恋

法橋顯眼

あつ浪の離の崎に立ちよ海をくまふふ心よかた

海邊道抄

從三位基雅

あつ浪の離の崎に立ちよ海をくまふふ心よかた

公任の家書合

惠孝法師

あつ浪の離の崎に立ちよ海をくまふふ心よかた

恋歌の才ふ

經平卿

あつ浪の離の崎に立ちよ海をくまふふ心よかた

家集

あつ浪の離の崎に立ちよ海をくまふふ心よかた

俊成法師

日

あつ浪の離の崎に立ちよ海をくまふふ心よかた

源順

草庵集

あつ浪の離の崎に立ちよ海をくまふふ心よかた

頓阿法師

玉葉集

あつ浪の離の崎に立ちよ海をくまふふ心よかた

忠度

新葉野縁

あつ浪の離の崎に立ちよ海をくまふふ心よかた

前中納言為忠

一 招嶋

ある人の子とくくりきせりける又の日ひ

ほろりーる

法原元輔

詞元集

のまゝ集

招嶋や磯ふしとある戸田鶴のあつとあつとえしと代を

重きとあ集ははしとくくりきせりける又の日ひ

子とものくくりきせりける又の日ひ

重きとの歌と原

八月十五夜和歌所を歌合よ海邊秋月とくふ

しとく

鴨長明

新古今秋上

招嶋や磯ふしと海人の秋は神月とくふとあつとえしと代を

建保六年内裡奇合意奇

前内大臣

新撰撰三

招嶋や磯ふしとあつとえしと代を

海邊に搦衣とくくりき

権律師公猷

續後撰秋下

招嶋や磯ふしとあつとえしと代を

権大納言実雄

續古今秋下

招嶋や磯ふしとあつとえしと代を

子五百番奇合意

右御門内大臣

日

風や夜とくくりきせりける又の日ひ

人九

日意四

松崎のうらみ人をも悪くする

野崎

とみ人

日

陸奥小右衛門尉松崎のうらみ人をも悪くする

蓮生法師松崎のうらみ人をも悪くする

見佛上人

新撰撰教

長き松崎のうらみ人をも悪くする

蓮生法師

松崎のうらみ人をも悪くする

法少細言

玉京巻一

松崎のうらみ人をも悪くする

松崎のうらみ人をも悪くする

松崎のうらみ人をも悪くする

前中納言定家

續千載秋下

松崎のうらみ人をも悪くする

前大僧正実助

新撰古今雜上

松崎のうらみ人をも悪くする

建保名所百首 下目

順徳院御製歌

松崎のうらみ人をも悪くする

定家歌集

松崎のうらみ人をも悪くする

家隆歌集

ゆきをいひしるるみる人なりぬのあまのうらみ

家隆朝臣

海士の神ありていふ事なり松竹も下を葉としる秋を別き

弘安元年百首

後九條内大臣

丈夫集

ふささすて枝さしつす松竹はつる木の木より生けぬらん

文集百首望春々未到可在海門東

慈鏡

日春

こころのくやまを川急流つちりて志をなごせし海客の志

雲葉

上東門院玄清

松竹ふささす波のさしつことみゆるこころのさけりしるる

詠藤花干此嵐與後篇虫嶋橋哥可併見志

家歌合

後系極

同言語奇

松竹や浦をさすきけ自か海士の刈岸をひきまのそ

浦島子

為相卿

日嶋辨

常葉はさすこころのぬ松竹やさすころのえは海よりさむ

澄麻 千鳥

法橋喜哲

松竹やこころある虫の流ひさし流の勢をふすしつる好

慈鏡

松竹やこころある虫の流ひさし流の勢をふすしつる好

建保名所百首

後成卿女

多しとてそを新屋をまの時の流より而ふとぬ裡に

曰

心新宗

たふはのちも尺や君と相嘗ふ相持をり之りかく心を

源氏須了

多や二人のこゝたを後ひ二條流つるもあつ

流ふと入道のまゝかき中り流すやうされ

後より言ふ

源氏

ま川流のあまははを屋といふ流んす向は浦人境たす以

人の口おのむけをばあつちせりて心の引かふ

まかせは川かめやまゝをそかへつるまゝ

とあま山ふをいふといふ流もあまさんほつる

もさうりゝるやまをみ流い

藤壺

境ふもつとまやうに相持ふ年か流士は其流

同夕露

ちいしむるはまももねは流ふて心の外をそり

かゝるもさだにたぬ流ひあそなくはくあひしあま

しそお流ふまのひかゝあまあ出くまのぬま

しあ流つるひとの種を引を流ひて

雲井

あまを根にむらうが相持れあまの流ふまやう

いさ

相つて一人もそを流すはまゝの流りまひ

りたふ流のまゝなちあつちまゝも心かあ

こゝろのれ

夕露
松室の蟬の如く衣別ぬとてぬきついつく岩さきぬ
一雄鳥 雄嶋浦

世帯刀不傳りて一付春字不款りてめり水不意

源重光之

後拾遺意四重之集

松室の蟬の如く衣別ぬとてぬきついつく岩さきぬ

青合一付りてり付意の款とて後傳りり

殷属門院大輔

千載意四

八月十五夜和歌所青合海邊秋月とてぬきついつく岩さきぬ

宮内卿

源重光之

新古今秋上

秋の夜も月やとて雲の如く衣別ぬとてぬきついつく岩さきぬ

和歌所青合海邊秋月とてぬきついつく岩さきぬ

秋の夜も月やとて雲の如く衣別ぬとてぬきついつく岩さきぬ

古御門内大臣の如く海邊秋月とてぬきついつく岩さきぬ

源重光之

秋の夜も月やとて雲の如く衣別ぬとてぬきついつく岩さきぬ

守覚法親王の如く海邊秋月とてぬきついつく岩さきぬ

皇太后字女御後成

秋の夜も月やとて雲の如く衣別ぬとてぬきついつく岩さきぬ

百子内親王

口 けしきよのききき旅の小枕つくしぬきそ 海士の神さ

前多々議親隆

新撰撰春上

よし川志田や燈塔ういそものたまたまく 形刻しそせあ向のく純

謙倉右大臣

續後撰巻二

浮名のもをー田の雲のぬきと衣ぬきとくしあを折しとるよ

西園寺右大臣前大臣

口 巻五

くまき石のし解崎の海素身をそえていふまにみん人の心を

皇太后宮大夫後成

海路時雨を

口 神ぬきし小崎の夜のもをりかきし川風さふしと時雨あふそ

大飛騨右大臣

千五百番歌合

續古今雜中

風ふけし雲は空の屋のたもろくそ 燈塔の夜ふそる浪さ

海月とくしそよふを折しひき

今上御製

新撰撰秋下

いそは燈さくしあしは短く 燈塔やまきし 向は浪ふそる月を

皇太后宮大夫後成

千五百番歌合

口 燈塔や燈し 向ふそふそる浪の月のさゆり 小舟を折し

遊義我門院

口 巻三

はまふそる折るしそをり 燈塔やまきし 燈塔小舟ぬき

藤原親生を折るしそをり

携命法師

玉葉冬

秋風く浪戸の塩合小月さえて雄略の歳子を志す

續千載表上

のしるる小雲のひるまに松崎やちの海士の神やほす

後京極

山階乃左大臣家十首歌の鴻月

津守國助

口秋下

浪うらる小崎のひるまに松崎やちの海士の神やほす

前奏議忠定

口

松崎や旗守の女由松崎やちの海士の神やほす

正三位知家

口志三

松崎や旗守の女由松崎やちの海士の神やほす

凡雅雜中

雲葉雜歌

從二位家隆

明けの松崎の松乃木よりちの海士の神やほす

前中納言有光

新千載志一

うらるる松崎の松乃木よりちの海士の神やほす

醍醐入左大臣

新拾遺志三

うらるる松崎の松乃木よりちの海士の神やほす

有家

新續古歌

浪うらる松崎の松乃木よりちの海士の神やほす

前大僧正実朝

口雅中

浪うらる松崎の松乃木よりちの海士の神やほす

建久四年六月番奇合字海人恋

定家

拾遺愚中上
こゝろ持々ハキリヤメ海士もいふとんほはぬくひ思ひ寄

俊頼

堀河百首
嵐ふくき白波の浪手寄 岩川浪り立さるくこ

後三位保孝

夫亦下門
ソノ秋ハ浪もかき松崎ももろいをり東の物も可成

建保八年八月八幡宮歌合海邊雁

俊成女

月
松崎の燈りまの柳子空しのふもたねはは雲の裡も糸

元元三年長尾奇合 法京猷園

月
たむらふ秋風ふけは松崎やとりの浪ふくくるありと金

源平広

月
沖川のせやそそり松崎や小菅の浦小舟寄る写行

磯千鳥 前中納言定家

月
誰を又松ふら風ふ松崎やとりの舟も寄るさるくこ

長義三年九月影浦の家奇合紅葉

後藤系忠兼

月
朝のき小崎の波の紅葉もあはるもよはる沖津波も

家集源上撰

源仲正

清うせふさし其梅花をけりて打まのこころをわけてわぬ

平野社歌合月前千巻 如覚法師

とえのる月の出燈おそくはけく小笠原の子を浦つふ

義山元三年長尾社歌合 彦謙 雅經

名残をやくの波よるりし能あつをさるるをんはて

義山元三年海邊帰しをのりて 陸奥又陸奥

檀少信郎自跋

新町の名残をよるのこころも社名はるる春の海支

家集松風曉冷といふこと いせ又陸奥

神祇伯歌仲

曉や旗の破の松風よ、夜をよ移よゆりのみねかよ

顯仲歌松葉集出紀伊國由等本書出于

茲者蓋誤也 志

見佛上人

友とていさはいとくもあ破の浪おそくもふ松風の音

玉吟

帰るべし小崎の海士をこころもああ知る中河

建保名所百首 家郷

世崎や旗の破の虫のそりいこころし浪をたな

康光

くは又いふまゝせん松島海や権守のあゆのよまの心むせ

お長

^{夫亦}海人のそそいふなりあてて松島や小島の松をなするを

後多羽院御製

あま人の神さうりとの浪たほさん小島の松の五月雨の浪
夏をよやくまゆみ松たけなするうきおの浪小秋風を吹

土御門公通右大臣

新葉

松島やまゝの浪ふしとせんまゝなるすけありやと

^{宗久紀行}

南ふじへる山陰の松まじりなすたのくたをまけ

なすまじりなす海のもくさつふし松をえんをすま

まふ松生このふたつとを松島を松ふしとせん

新ふ丹ふ松の志はえのそとをいふとゆいふ

そとをいふとゆいふとゆいふとゆいふとゆいふ

小島松の海一舟あつたはと松島をいふとゆいふ

松島松の海一舟あつたはと松島をいふとゆいふ

松島松の海一舟あつたはと松島をいふとゆいふ

松島松の海一舟あつたはと松島をいふとゆいふ

松島松の海一舟あつたはと松島をいふとゆいふ

松島松の海一舟あつたはと松島をいふとゆいふ

松島松の海一舟あつたはと松島をいふとゆいふ

しうハニニ百とやうに侍りき

たゞもろくも別のあそびもや遊覧の殿の海をさぐる

一松の浦嶋

五城郡今松の濱とふ

西院の石はくくかあそび終ひて松をさそび

いりる時々の院の中納の松乃木をさるつとて

つけ侍りける

素性法師

後撰雜一

さうふまきく松のつゆりさそびる人ある松のつゆり

ての歌とて讀侍りける

影昭法師

千載冬

流るよりそそびる松をさそびりける松の浦嶋

歌をさる

松部成義

新抄撰雜四

心ある松のつゆりさそびる松の浦嶋

海をさる

藤原光俊

續後撰雜六

降つともさそびる松の浦嶋

少小はつりける

大納言為家

玉葉卷三

流るゆる松のひるも忘る松の浦嶋

文永二年白河殿を人歌とさるつとて七百と

歌つとさるつとて七百と

夫木集文永二年七月
七百首浦嶋と有

後嵯峨院御制本

新續古今春下

心ある海すやうるらんまき毎小孫嘆ゆる 杉のうらみ

鴻鶴を

源俊年

玉葉雜上

芦田路のちくちくとも遠く中野之浪をわたりて 杉の浦路

衣笠内大臣

新撰六帖

いふらん歌のつゝふはらまきしゆやとん 杉のうらみ

家集巻の巻盛る杉のともふて

源有仲

夫外集下同

やうはらのわらわ杉の浦まきこころあふぬ 杉の浦路

宝治二年百三みりのく 常陸守大臣

十日 十心語もふふ子とやわらぬん 杉の浦路

六帖

権後公

十日 増たうあゆみその名をささぐりやす 杉の浦路

康元元年毎日一首中 民部卿為家卿

十日 夏苜の萩のふきえのさしきふしとて 杉の浦路

慈徳

拾玉

蛸の子もやと種ぬしとて 杉の浦路

心あるものうらみせん海寺くね舟いよと 杉の浦路

家隆

玉吟

思ひあふる杉の浦 杉の浦路

後多羽院

まきやあつとくくやソコ如日影さし新舟をまわす

後成卿

形あかく人やありけし浪風ふ衣ふ形も松の浦一由

真和百首

下野

まよふ月やこころある夜虫の夕朔月ふさそすま月こころ

草庵集

頓所法師

月こころをえぬりりハハあるあゆもいそし松の浦

源氏柳本

けけ池の宿水宿の柳のりきま月ハハ

いそれぬふとを向くむの物とれははるる

あるとをのひやふふりすしはるる又か

あつとくく

源氏

たつとくくあつとくくあつとくくあつとくく

とまよふこころをえぬりりハハあるあゆもいそし

ゆりりけをえぬりりハハあるあゆもいそし

まよふ月

後

あつとくく世のけりりたふけりりこころをえぬりり

按讚岐有同名但其文字作麻都我浦仍
載其証哥干後以合其異同

無名氏

一

まよふ月やこころある夜虫の夕朔月ふさそすま月こころ

いのもほのほ

慈法

拾玉 甲方の海やまゐのときき松浦のまきの港ふま風をふく

定頼

後拾遺

松山のま川のそ風ふきまをえひろむそをの恋はす貴

光成

か

あぬふらふれぬまぬ衣ふままふらふら松浦浪

竹園三百首

宗尊親王

いある雲の破屋の想ふてやあふれなるま川の浦の白

行能

松のそれと海つゝの波と浪と名はるる松の浪と

一美豆小嶋

玉造郡名生定村をくろまきの西南四五町がりや津
の赤岸小有或人云特原郡なる遠嶋の中黒嶋と云
て海中小永く松出たる時是小永嶋二つの小嶋と
けるものと云り

古今和歌集

古今和歌集 美豆の小嶋は人好む顔のつとふとてい海

順徳院御製

古今和歌集 人好む松岸もさきさきの高きまきの松小嶋の秋の夕暮れ

たみけの川あはれ流を好むものなり神のつらに流る

重之

家集

あふ深ふまりなるとひしむる衣神のつらにむもゆふり

とひこのの君おやにむくれとまけくとまけと

小大君

家集

そこの川より、瀬あはれ海川神のつらにあはれとを思ふ

寂念法師

夫亦

若くはめや神のつらにむもひしむる衣神のつらにむもゆふり

冷泉為久

ほくあはれお流るふくまは旅衣神の流れ流るぬるすれ

一 信支渡

或曰まの流ふにあはれと只あはれと云まの流あはれと云り

陸奥玉へまのりりるふまのあはれと云ふ所ふあはれ

と云人まのりりるふまのあはれと云ふ所ふあはれ

能因法師

後拾遺雜

あはれ原流るる石の若くは人をまのりりる流るなり

一 狭布渡

狭布社甲乙の流のあはれと云

六帖

大を流る流る流のあはれと云ふの流るなり

一 離のつり

澄香上の離のつり出す

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

磯

一 泊磯

津軽郡小右と云祝もあれと松ヶ浦崎の邊半丁

光慈院乃乃不親王家五十首 とりの磯 陸奥

従二位新能々

松のつりのつりの磯とつりのを名もさしつりつり磯

一 松嶋磯

松嶋のつりつり

一 雄崎磯

雄崎のつりつり

一 函

1861. 12. 20

Dear Sir

I have the honor to acknowledge the receipt of your letter of the 14th inst.

and in reply to inform you that the same has been forwarded to the proper authorities for their consideration.

I am, Sir, very respectfully,
Your obedient servant,
John Smith

Received by Sir

1861

John Smith

一 封

函

